

ある教材の深化

「非識字体験ワークショップ」の実践から

廣瀬聡夫(元NPO法人ダッシュ)

1. はじめに 「識字BOX」について

今日の報告は、「非識字体験ワークショップ～もし、あなたがよみかきができなかったら？」というアクティビティを実践してきた経験と、その中でこのアクティビティのねらいが変わってきた過程を中心にお話しします。

このアクティビティを一つの教材として入れて「識字BOX」という形にして販売しています。箱の中には他に、「日本と世界の識字問題学習教材『識字BOX』活用手引き」として、学校の授業で活用してもらうことを想定し、45分授業を6回、実践していただくプログラム案と「学校授業教案と記録」

(02.2.14現在)を入れてあります。また、ワークショップに必要なもの、ビデオや参考資料の冊子などが入っています。「識字BOX」というのは、名前からわかるように、開発教育でやっている「 Bangladesh BOX」「フィリピンBOX」などの発想をそのまま使いました。

まず1回目の授業では、どういう現状があるかを学ぶということで、「がんばるしきじ」というビデオを導入で観ていただいて、感想を出し合ってもらいます。このビデオはもともと、私たちが活動している和泉市(大阪府)の識字学級に人を誘うためにつくったビデオです。「識字の勧誘に文字のチラシをつくっても意味がないやん」ということで、現場の様子や活動している人などを映像で紹介しているのですが、人権研修でも使えるなあということで、このBOXに入れました。

次に歴史の説明です。和泉の識字学級は1970年代の同和地区での識字学級から始まっていますが、それがどんなふうになってきたか、識字学級生の作文などを活用して学んでもらいます。また、最近では外国人の増加にともなって、日本語教室が増えてきていることについても、学習してもらいます。

3回目には、世界の識字について学ぶということで、Bangladeshの様子を紹介する資料を入れてあります。和泉では「シャプラニール=市民による海外協力の会」というNGOが間に入って、1997(平成9)年からBangladeshのパプリというNGOと地域同士の交流をしていて、その紹介をしています。BOXの中にはBangladeshにスタディツアーに行った時の報告書も入っています。

そして『識字BOX』活用の手引きの4段階目に「非識字体験」、「非識字ってどんなことなんやろう」と体験するワークショップがあります。

2. 「非識字体験ワークショップ」の具体的な流れ

まず、アイスブレイキングとしてフルーツバスケットをします。そこで参加者の中でハングル(韓国朝鮮の文字)がわかる人がどれぐらいいるかの見当をつけるようにしています。アクティビティでハングルがわかる人が当たると効果が出ない時があるからです。

●ワーク1 非識字体験①（よみ）「駅員とお客の会話」

パターン1 「駅員は、お客が字を読めると思っている場合」

駅員役とお客さん役を決めます。他の人は2人のやりとりを見ている。

駅員役とお客さん役は向き合って座りますが、その間にボードを立てます。ボードの駅員さん側には日本語の路線図が描いてあって、お客さん側はハングルで書いてある路線図になっています。駅員さんは、お客さんがハングルの路線図を見ていることを知りません。お客さん役の人には「路線図がハングル版で書いてある」とは言わないように約束します。また、路線図は地理勘があるところだとわかってしまうので、あえて札幌の路線図を使っています。

駅員さんに「お客さんが『〇〇駅に行きたいので行き方を教えてほしい』と質問したら教えてあげてください」と伝えます。

お客さんの方は自分が路線図のどこにいるのかすらわかりません。駅員さんに「そこから3つめの駅で乗り換え」とか言われてもわからない。



駅員役の人は、話し言葉は通じているし、同じ絵を見ているからわかるだろうと思うのに、相手がわからない様子なので「なんて物分りの悪い客だろう」とイライラしてきます。お客さんの方には、説明はしてくれているけれどわからないということを体験してもらいます。周りで見ている人は、駅員とお客の両方を見れるので、状況がわかります。駅員だけが、相手がハングルの路線図を持っていることがわからない。「これだけ説明しているのに」と思う状況になるんです。ワークの後の振り返りでは、駅員役の人から「だんだん腹が立ってきました」といった感想が出ます。

この体験をしてもらった後、在日コリアンと同和地区の人の非識字の現状を説明します。会話でコミュニケーションははかれるけれど、駅員が文字を読めるものと思って説明するとわからないという状況です。昔は駅員が切符を売っていて、駅名を言えば切符が買えたけれど、今は自動販売機になっていて、非識字者にとっては困るという現実をベースにつくられたロールプレイです。

パターン2 「駅員は、目の見えないお客とわかっている場合」

次に、お客さん役の人に目隠しをしてもらいます。駅員さん役はパターン1のときと同じ人にしてもらいます。駅員さんは、明らかに目が見えない人が対象なので、路線図を見なくてもよいような説明の仕方になりますよね。

同じ人に駅員をやってもらって、このパターン2と1の場合ではなにが違うのかを振り返ってもらいます。

パターン3「駅員とお客で全く言葉が通じない場合」

3つめに、これはお遊びのようですが、地図を持っているお客さんは「さかさま読みの国の人」と設定します。「ひばりが丘まで切符一枚ください」という言葉をお客さんがさかさま読みをして言います。駅員さんは何を言っているかわからない。完全に言葉の通じない人がきたという設定です。まあ、固有名詞は何語であっても読みは同じだから本当はわかるのですが、明らかに最初からコミュニケーションが取れない人がきた場合、どう説明するのかを体験してもらおうというものです。

この一連のワークを実践しはじめた当初は、お客さんがハンゲルのボードを見せられて困る、要するに「非識字だと、こんなふうに困りますよ」という非識字体験を主眼にやってきました。役割についても最初は、お客が3人、駅員も3人と、パターンごとに全部参加者に交代してもらっていたんです。

けれど最近は、駅員の方の気づきに主眼をおいています。そのために駅員役の人にはずっと通してやってもらい、パターン1と、2・3の場合を比較できるようにしています。駅員が、相手が読み書きできないとはわからないなかで説明をして、路線図を見たらわかるはずなのに、なかなか伝わらないお客さんをどう思うか。パターン2の視覚障がい者であればすぐに相手の状況がわかるので、それなりに親切にするし、パターン3のように明らかに言葉の通じない外国人ならそれなりの対応をするけれど、最初のパターンの場合、非識字という現実気がつかないことによって、両者のあいだの溝が深まるわけです。

同和地区の人など非識字の人を相手するときと、視覚障がい者を相手するときでは、自分の対応も変わったと自覚できるように振り返りをすることが大事です。

●ワーク2 非識字体験②（かき）「住民票と在庫リスト」

パターン1「市役所の窓口」住民票の申請の場合

参加者みなさんはソウルにいるという設定で、私（ファシリテーター）が市役所の職員役をするので、住民票をとりきてもらいます。ただハンゲル版の住民票になっていますから、「名前と住所を書いてもってきてください」と言っても、どう書いたらいいのかわからないというシミュレーションです。

「字の分からない人のために、ここに五十音表を置いておきます」と言って、窓口の横にはハンゲル版の「五十音表」を置きます。「あ」という音はハンゲルではこういう字ということはわかりますから、これを見て字をひらっていけば、とりあえず書ける。もし、それまでのワークの中で、ハンゲルの分かる人が参加者の中にいることがわかっていれば、その情報をみんなに伝えておきます。

それで参加者がどういう行動にでるかですが、（1）ハンゲルの五十音表を見ながら自分で書く、（2）書ける人に書いてもらう、（3）役所の人に書いてもらう、（4）英語など別の伝わると思われる言語で書くなどが考えられます。

参加者は圧倒的多数が識字者なので、（1）、（4）の反応が多いです。もう十回以上やっていますが、「書けないので、書いて下さい」と窓口の私に言ってきた人は皆無です。ほとんどが自分で書こうとします。非識字者には現実にはありえない話で、これは識字者がとる行動です。

それで「明らかに書けないのに職員に『書けません』と言えなかった自分というのは何やねん」というのが振り返りで出てきます。

パターン2「職場上司の仕事上の指示」在庫リスト作成の指示の場合

市役所ならお願いすれば書いてもらえるでしょうが、職場となるとそうはいきません。

会社の社長の役をした私が、ふんぞり返って「早く納品しなければいけないから、洗濯バサミの在庫リストを色と種類別でつくれ」と指示します。参加者の人たちは社員として、ハングルで在庫リス

トをつくらなければなりません。社長役の私は「早よせえ」「こんな簡単な仕事がでへんのか」と急かします。参加者にとってみれば、バカにされているように感じるでしょう。

開発教育協会が実施した講座でやったときは、「こんなんできへんわ」と完全に投げ出して座っている人や、英語で書いたり五十音表で字をひろってハングルで書いたりする人にとわかれました。けれど、さっきの五十音表で「洗濯バサミ」をひろって書いても、それは日本語の音をハングルにしただけなので、意味が通じません。



最近ではワーク1と2を一気にやって、一括して振り返りで掘り下げるようにしています。

最後に識字学級生（大阪府富田林市の吉田一子さん）の作文「わたしの おかね なのに」を輪読してもらいます。これは、銀行の出金伝票を自分で書けなくて、お金が引き出せずに困ったけれど、識字学級で勉強して書けるようになったという内容の作文です。

3. 識字の現場訪問を組み合わせる

2002年には、「識字BOX」で提案している全6回のプログラム案を実践してみましたので、ワークショップの後の「識字BOX」の残り2回についてはその実践からご報告します。

和泉市立幸小学校の5年生を対象とした国際理解教育で実施しました。その小学校では、午後から識字学級が開かれていたのですが、水曜は小学生は昼で帰りますから、3時から始まる識字学級を子どもたちは知らないのです。

子どもたちが識字学級をたずねると、必ず識字学級の学習者は「しっかり勉強しいや」という話をしてくれます。子どもたちからは「自分らはいいやややっている勉強を、なんでこんなに一生懸命楽しそうにやっているんやろう」という感想が出ます。事前学習をしていないと、結論は「こういう、かわいそうな人がいるんやから、これから私もなんとかしてあげたい」というおきまりのパターンになりがちです。子どもたちには「識字学級で学んでいる姿は、かっこよく言うと本来の学習の姿と違いますか」という問いかけをします。

そういう体験から「識字BOX」としては、「ワークショップをしたあとに識字の現場を訪問してはどうですか」と提案しています。近くに識字学級がなかったとしても、日本語教室は多いので、ワークショップの次に現場にうかがうことを勧めています。

そして最後の6回目は、識字学級で生徒と先生がつくったカルタでカルタ取りをしました。カルタ札

の絵を見て、描いた学習者の気持ちを想像してみようと、フォト・ランゲージのような手法をします。絵を見て、学習者の気持ちになって言葉の札をつくってみたこともありました。あとから、それぞれのカルタを書いた人のエピソードを紹介して振り返りをしました。

ただ、非識字の人の存在を知っても、子どもがすぐに具体的にできることはなかなかないので、たとえば「書きそんじハガキで世界の識字を支援しよう！」と呼びかけます。子どもたちが集めてくれたハガキをNPO法人ダッシュが集約して、バングラデシュのパプリという地域指定で送りました。子どもたちが地域と地域の交流をサポートをしてくれるわけです。2006年は20数万円分集まりました。

4. このワークショップにかかわるいくつかのエピソード紹介

路線図が読めないという話は、どこの識字学級でもよく聞く話なんです。そのエピソードと大阪の開発教育協会で活動されていた大森正子先生が作られたハングルの大阪市内の路線図とを組み合わせたら、なにかできるなあと考えたんです。それから駅員役を設定して、ロールプレイをしたらわかるかなあと考えました。

従業員の話は、識字の集まりで森実先生が八尾市の識字学級の事例で「仕事に行った時に社長に怒られた」という学級生の経験を話されていたのがヒントになりました。

初めて「駅員とお客の会話」のアクティビティをやったのは、2000（平成12）年、「第1回泉北よみかき交流会」でした。非識字者も参加者にいたので、字を書かなくていいワークをしようと思ったのです。実際やってみると非識字者自身から「私もこんな経験いっぱいある」「ようつくってくれた」という意見をもらいました。

そのとき、実際に識字学級に通っている人に「駅員さんとコミュニケーションをはかれないとき、どうするんですか」とたずねたら、一番多かったのは「タクシーに乗る」でした。次に「行かない」。「とりあえず初乗り120円分だけの切符を買って降りるとき清算する」というしたたかな回答もありました。市役所の窓口とか郵便局の窓口とかでも、いっぱいそういう事例はあるわけですね。どこの窓口でも「書けなければ手伝います」というスタンスやけれど、当事者は「書けません」とは言わない、言えないから、問題が見えない。

同年に、このワークはとよなか国際交流協会と地球市民教育センターがやっていた参加体験型学習教材コンテストに入賞しました。それで、のちに作成されたビデオ「がんばるしきじ」などと組み合わせ、「識字BOX」として製品化しました。

高校生のユネスコ・クラブが和泉に研修にきたときにも、このワークをやりました。当初はワークのあと、「在日コリアンは…、同和地区では…」とすぐに説明してしまっていました。つまり、参加者の気づきを掘り起こさないうちに、ぼくが「答え」を言ってしまっていたのです。参加者からは「強引なファシリテーターやな」と言われました。

それは、自分のスキル不足もあったんだけど、一方で、ワークのあと「じゃあ、みなさん考えましょう」という言葉だけでは絶対終わらないでおこうという気持ちがあるのです。もちろん参加者には考えてもらっただけで、「『うちの地区では、こんな取り組みをしています』ということは必ず言おう」とダッシュのメンバーには言っています。答えを押しつける気はないけれど、自分なりの結論を言おうということです。

同和地区では総合施策として、いろんな課題に取り組んでいるし、やろうとしていることがあります。取り組み事例を紹介することは、部落発のNPOとしてはこだわっているところです。

ダッシュとしてはフィールドワークが一番得意とするところです。出て行ってせないかん時はワークショップをするけれど、「うちの同和地区は実際の人権運動を体感できるフィールドワークをやっているのでまたきてください」というのが最後のしめくりです。疑似体験はあくまでも疑似体験で、実際の体験のできる場所がある以上、そこに来れる人は来てもらうことに越したことはない、これもある意味、一つのワークショップです。ただ、これまでのフィールドワークは問題が具体的であるがゆえに、答えは一つしかなく、現場がその答えを参加者に「押しつけ」でいました。しかし、ダッシュがやっているフィールドワーク（「ダッシュツアー」というタイトルがある）は一つの事例として紹介し、自分の地域ではどのようにできるか（だから、答えは参加者が持っている）を考えてもらうスタンスです。

5. ワークショップのねらいの変遷

－非識字者にとってのバリアを意識する

この非識字体験ワークショップは、何度も実践していくうちに、ワークで重点を置くねらいが変わってきました。

最初はこのアクティビティのねらいは文字通り、「非識字体験」をすることにあっただので、「お客」や「従業員」が主役でしたが、最近では「非識字者の存在に気づかない自分に気づく」とともに、「識字者と非識字者のあいだの壁に気づくこと」にねらいが変わってきたのです。つまり「識字者の側の問題」に気づこうということです。「駅員の心理」や「人に頼めなかった自分」について、振り返るよう問いかけます。ワークをやった後、駅員役や説明を聞いても分からなかったお客役の人の気持ちを出してもらって、グループ討議の中で掘り下げてから、同和地区の場合の事例とかを説明する、というふうに改良しています。

ワークの最後に読む吉田一子さんの作文は「書けるようになってよかった」ということで終わっていますが、こちらについても、吉田さんが書けるようになるまで支えた識字学級の講師、吉田さんのエンパワメントを助ける側の存在にも気づいてもらうように問いかけるようになりました。

障がい者問題、在日コリアン問題なども出てきますので、「非識字」は、部落差別もですけど、他の課題にも共通する問題ではないかというふうな問いかけもしています。

たとえばこのあいだ、「車イスで街に出よう」というワークショップをやりました。和泉府中駅は階段しかない駅です。駅員さんは嫌な顔もせず、車イスに乗っている人も一緒に、重い電動車イスを担いでくれました。駅員さんが5人ぐらいが汗だくになって担いでくれる姿を見て、「ぼくやったらよう頼まんな」と思いました。

実際に障がい者にたずねると「和泉府中駅と信太山駅は一駅だから、電車に乗らずに電動車イスで行くわ」と言われました。他のお客さんがいなくなるまで待って、20分かかって駅員さんに階段を担いでもらうなら、電動車イスで行ってもあまり時間は変わらないということでした。駅にバリアがあるからそうなっているんです。頼む側に「駅員さんに気の毒」という気持ちを生み出しているということを痛感しました。

非識字ワークでも、「一生懸命説明してくれているけれども、それを理解できない自分がダメだ」と、非識字者が内に閉じこもる方向に向かいがちだということをもっと強調すべきやなあと思っています。識字者と非識字者の壁みたいなこと。「識字者は気がつかないし、非識字者はそのことによって、ます

ます制約されていく」という構造に参加者が気づけたらなあ、と最近は考えています。ちょっとずつ、ぼくの視点が変わってきているかなと思います。

そういう意味で、改めて考えると「非識字体験ワークショップ」という言い方はちょっと違うと思いました。「非識字者の存在に気づかない識字者の気づきを生み出す」という内容で、うまくいい語呂を見つけないかと思っています。ただ「模範解答」を想像させるタイトルや場面設定は、あまりしない方がいいのかなあ、とも考えていますけれど。

6. 最後に

ー部落解放運動とつながるNPOダッシュのオリジナリティー

07年度には、大阪市の委託を受けてこのワークショップを大阪市内の数カ所でもやります。ダッシュのスタッフには「識字学級にもかかわらんといて、このワークができるか？」と言っています。「ハンダで困る人」は誰でもできます。その時に、「部落のおっちゃん、おばちゃん」の事例を、人からの伝え聞きで話をするのと、自分が直接聞いて話をするのでは重みが全然ちがう。「現場が近くにあるねんから、そことつながっている人間がファシリテーターをやることに意味があるんとちがうん？」と、若いスタッフに問いかけています。皮肉っぽく言えば「人権学習屋のダッシュになったらあかん」と言っています。仕方がないことやけれど、開発教育協会などがやるとどうしても、言葉の通じない場面に出くわして困ったという「非識字体験」で終わってしまう。現場が遠いからです。

しかし、「ダッシュは部落とつながっているNPOやから、部落の実践にちゃんとかかわって、識字学級にも顔をつないどいてやらんとあかん」と思うのです。部落解放運動とつながっているNPOというのが、ダッシュの「売り」やと思っています。ダッシュとしては、解放運動の経験がでるワークをつくるべきやし、やらなあかんと思っています。

ファシリテーターのスキルとしては、たとえば栗本敦子さんたちがやる方がはるかに質は高いんですけど、運動の経験をしている者自身がいっぱい事例をもっていて、それを紹介するのがダッシュの責務だし、オリジナリティーになると思うんです。

ぼくも毎日、識字の現場には行ってないんですけど、一応細く長くつながっています。そこは切らしたらあかんと思っています。それは大事なところなんやろなと思います。

■ 討議

栗本 「ねらい」が変わっていったという話がおもしろいですね。

一番はじめの教材なら、「字が読めないことは大変なことだなと思いました」という感想に留まってしまうと思うんです。それが、識字者の側が字が読めることに対してどんな感覚を持っているのか、識字者と非識字者の壁がどういうふうにつくりだされたり、持つことになったりしているのかというところで掘り下げていくというふうに変ったんですね。それは、常に人権課題がそうであるように、マジョリティーの側が変わらなければいけない、多数派が何に気づくかというところを掘り下げていくことだと思います。駅員さんをやる側の気持ちに焦点を当てていくというのは「学び」としてはより深まると思います。

ー非識字者のつらい思いに共感するというのもあるけれど、もっと大きな社会の仕組みの中で

自分はどこに立っていて、そのことが何を意味しているのかというところまでいくのが、少なくとも大人を相手にワークショップをするときには大事だと思います。そういうふうに教材が発展してきているんだなあと思いました。

上杉 ある程度同和問題を学習している人だったら、そういうところで気づきが出てきますよね。これ、完全な初心者を対象にやった時には、どういうふうに展開できるのかなと思うのです。「イライラする」というところまではわかりますよね。「イライラする」というところから、社会問題として部落差別を理解するまでのつなぎというのは、どうなるでしょう。

栗本 私はワークショップの手法の専門性を持っているということでこの場にいると思うので、その立場から言いますと、なぜ、これをあえて参加型の教材でやるのかということを考えて時、振り返りで「やってみてどうでしたか？」ということだけではなく、「鍵となる問い」が重要だと思います。振り返る時の切り口とか「この点はどうでしたか？」という投げかけができるかによって、参加者が単に「イライラした」ということだけではなく、そこからもう少し構造的なことに目を向けていくことを促す「鍵となる問い」を考えていくということが、今の上杉先生のご質問に対する方法だと思います。

上杉 学校教育では「いい質問ができる教師が一番よい教師」と言われています。単に、オウム返しを受け答えをするのではなくて、次々と視点を展開していく、というか。何か、そういう投げかけがなかったら、進みませんね。

栗本 そうですね。たとえば、車イスのワークの話で言うと、廣瀬さんは「当事者が閉じこもってしまう感じ」と表現されましたが、私などはそういう状態を「差別の内化」と説明します。自分で自分を抑えてしまう体験を繰り返していたら「この人はどうなっていくと思いますか？」と問いかけ、そこから先は想像してもらおうのです。

「この場面でどうしますか？」という問いでは、「タクシーに乗る」「次の駅まで歩く」という意見までは出ます。さらに、こういう体験をしょっちゅうしていたら、その人はどういうふうにものごとや社会と向き合うようになるとは思いますか？といった問いで考えていってもらうことで、「部落の人らは何であなん？もっと自分でがんばったらええねん」といった意見に対して「何でそこまでしんどくなってってしまうのか？」というところまで踏み込んで考えていってもらうこともできると思います。

逆に、駅員の役をやった人だったら、なぜそこでイライラするのかというところを、もう少し丁寧に考えていったらいいのではと思います。

事務局 参加者を駅員側のグループとお客側のグループの2つに完全に分けた方がいいかもしれない。見ている人も駅員の気持ちになれる。

栗本 そうですね。そうしないと、駅員とお客の両方を見ている人が、高見の見物というか、評論家的な感覚になってしまうかもしれません。グループで分かれてロールプレイをやって、そのあと、それぞれの同じ役割をした人同士でディスカッションするといいんじゃないかと思います。

廣瀬　あえて駅員を1人にせず複数で説明してもらってもええと言ええですね。駅員を3人1組にするとか、増やすことはできると思う。

栗本　「市役所の窓口」のアクティビティも、もうちょっと丁寧に振り返りをやるともっと面白いと思います。ハングルが書けないのに、自分で書こうとしている人たちに、「何で自分でやろうと思ったのですか？」と問いかける。自分でできなくちゃいけないという能力主義的な意識を強烈に持っていると思うんです。それは必ず裏返しになっていて、人に頼まなければいけない人に対する「もっと努力して自分でできるようになるべきだ」という発想とつながってくる。「何で自分でやろうとしたのか」を丁寧に掘り下げたら見えてくるものがあると思います。

(2007. 10. 17)

本文中写真：廣瀬さん提供